

らいてう生誕140年 らいてうの会25周年 らいてうの家20周年

秋の 記念講演は 田中優子さん

今から60年前、らいてうは、「このいまわしい反動の嵐の中で、わたくしたちはどこまでも憲法を防波堤として闘う必要があります、それゆえにこそ、憲法改悪を狙う汚れた手から、あくまでも憲法を守りぬかなければならないと覚悟しております」と書きました。自身もアジア太平洋戦争の惨禍を体験したらいてうは、朝鮮、中国をはじめとする各国への加害の責任も重く受け止めて行動したのです。激動の「戦後・被爆80年」を超え、新しい年を迎えた今、日本は「戦争する国」への道に深く踏み込みつつあります。私たちも、一層の覚悟を求められているのではないのでしょうか。

この間、私たちは、らいてうの世界平和への願いを受けつぎ発信するための行動に力を尽くしてきました。「らい

記念事業

7月4日(土) 上田市 市民プラザ・ゆう
らいてう講座 「20年を振り返って」
花岡静枝さん、杉山洋子さん、小林典子さん

8月9日(日) らいてうの家
フェスティバル 世界平和を願って

10月3日(土)
音楽詩「雷鳥の歌」
サントミューゼ(上田市交流文化芸術センター)

11月28日(土)
記念講演 田中優子さん
東京ウィメンズプラザホール

てうの家」は、地元・上田市と真田町の皆さまのご支援を受け、「平和・協同・自然」のひろばとして楽しい学びと豊かな出会いの場となつてきています。

この記念すべき年にあたり、今後の会と家の活動の発展を願い、左記の記念事業を準備中です。次の10年に向けて引き続き温かいご支援を心よりお願いいたします。

*

おぼろげな
らいてうの会ニュース

発行
平塚らいてうの会
〒112-0002
東京都文京区
小石川
5-10-20-5F
TEL・FAX
03-3818-8626

実行委員会を重ねすすむ準備

今年は、2つの講演会を企画しました。2月には、らいてうが私の宝物と語った日本国憲法の九条を守る活動の中心として活躍されている小森陽一さん、11月には、現在の日本の当面する問題について付度のない発言とらいてうについての言及が頼もしい田中優子さんをお願いし、快諾していただき、期待が膨らみます。

(三留弥生)

らいてうの家では、上田・真田の元会長・建築工事に関わった方々を中心に20年を振り返る講座の開催、国内外で活躍する方々の演奏、多彩な出店のフェスティバルを計画。そして秋には音楽詩「雷鳥の歌」を上演します。

(沓掛美知子)

会25年、家20年のあゆみが一目でわかる記念冊子を作ります。「平和・協同・自然」のひろばとしての家がでるまで・できてからの活動を、写真で振り返ります。25年間の多面的な活動の詳細は年表をご覧ください。

(堀江ゆり)

記念講演会(らいてう講座)のお知らせ

平塚らいてうと日本国憲法

講師 小森陽一さん

会場 新日本婦人の会中央本部2階
日時 2月22日(日) 14時～16時

森のめぐみ講座 青木の里巡り

義民の魂 今も受け継ぐ



坂井弘さんの説明を聞く参加者＝10月6日

10月の森のめぐみ講座では笹刈り作業の翌日、義民の里青木村巡りを行いました。案内は青木村在住の坂井弘さん弘子さんご夫妻です。弘子さんはらいてうの会会員です。清々しい秋日和のなか、総勢20余人の参加者と研修しました。青木村女性議員の皆さん、坂城町等からの参加者もありました。

引き継がれる反骨の精神

青木村は上田市の西方に位置しています。昔は上方から流入する文化・経済の入口と言われていました。そのため経済力や文化度が高い土地です。江戸時代から明治にかけて一揆の数は信濃国が第1位で、その中でも上田藩青木村は5件にも及ぶ多くの一揆の指導者を輩出しています。「夕立と騒動は青木から」と語られてきました。

今回は初めに、青木村歴史文化資料館を訪問。これから訪れる義民の墓と百姓一揆の歴史、栗林一石路について学びました。栗林一石路は明治27年青木村生まれ。「一石路」とは一本の石ころだらけの道を行く男という意味であるといっています。萩原井泉水を師とする自由律俳句運動に関わり、その後プロレタリア俳句に転じます。彼はまた、村の青年運動に熱心に関わり『青木時報』の初代編集主任を務めました。今回いかれなかった青木村郷土美術館前に「シャツ雑草にぶっかけておく」の碑があります。ほかに「妻よだかれてふるさとの山へ帰ろうよ」「なにかも月もひん曲がつてけつかる」などの歌が残されています。弘子さんは一石路と共に歩んだ妻斎藤たけじの存在の大きさも語ってくれました。

*

次に宝暦義民の墓を訪れました。宝暦騒動は1761年（宝暦11年）上田藩の民政を根底から揺るがした最初の全藩惣百姓一揆といわれています。車では入れないほど細い坂道を登ったさきには、ありました。夫神山組頭中澤浅之丞と百姓清水半平が祀られています。埋もれていた墓を、後の時代に人々が掘り出して建て替えました。青木村の穏やかな秋の様子が一望できました。

さらに、明治の世になり、この伝統を引き継いだ山本虎雄は、青木村青年会長を務め『青木時報』発行。また他に先駆けて、村営巡回産婆設置事業の実現に尽力しました。この事業は1968年まで続き、女性と子どもの命を守ることに大きく貢献しました。1940年から村収入役に就き

ます。満蒙開拓団募集の文書に応じないよう村長に進言したとされ、戦後は村会議員を16年間務め、学校給食の脱脂粉乳を生乳に替え、老人医療費の無償化などを実現しました。大法寺近くの坂井さんの土地にその顕彰碑があります。

自立の道を歩む青木村

「平成の大合併」によっても青木村村民は自立の道を歩み続けています。江戸時代の農民一揆から続く義民の魂が今も生き続けていると言えます。青木村中学校では毎年生徒有志により文化祭で「義民太鼓」の演奏が行われます。30年以上引き継がれていることです。

(若尾伸子)



自然豊かな青木村の景色をバックに記念写真＝義民の墓の前

音楽詩「雷鳥の歌」

～平塚らいてうの魂と宇宙を体験せよ～

この作品誕生のきっかけは、制作者がらいてうの自伝に出会い、その文章の「音楽性」に深く心を動かされたことにあります。らいてうの書く言葉は、単なる記録や思想ではなく、内面から湧き上がるエネルギーと詩的なリズムと響きを持っていました。そこで「彼女の世界を音楽詩として再現でき

2026年10月の記念事業で上演させていただく本作は、平塚らいてうの世界観と魂の響きを、音楽と朗読を通して体験できる特別なステージです。出演は、舞台・映像で幅広く活躍する長野里美さん、シルクロードを彷彿させるオリエンタルヴォイスの歌手Emmeさん、そしてピアノと作曲・制作の私・松本MOCOです。



ないか」と考えたのが始まりです。

制作過程では、「女性は大太陽である」という有名な言葉以外あまりに知られて来なかったらいてうさんの様々な魅力を、音楽と朗読でどう表現すべきか、数々の葛藤がありました。言葉の持つ力を損なわず、かつ音楽の中で息づかせる作業は、簡単なものではありませんでした。出演者3名、意見を交わしながら、試行錯誤を重ねました。

長野里美は、演劇的な視点から言葉に新しい命を吹き込み、Emmeは、「言葉の奥にある宇宙」を声で探り、松本のピアノで躍動を加える。ひとりの女性として人間として、身近な小さな喜びが世界へ宇宙へと羽ばたいてゆく、らいてうさんのダイナミズムが存分に伝えられるよう願っています。

『雷鳥の歌』では、平塚らいてうが残した言葉と、その背後に広がる思いと、生命へのまなざしを、音楽と言葉を通じて観客の皆さまに体感していただきます。

そして、戦後80年を超えてなお世界中で絶えぬ戦禍に、人としてどう対峙するか、その痛みを同様に、いやもつと痛切に感じていたであろうらいてうさんの「世界民」という宇宙観を、ぜひ一緒に受け取ってみていただけたらと思います。

(松本MOCO・音楽家)

音楽詩「雷鳥の歌」

2026年10月3日 14:00開演予定
サントミューゼ(上田市交流文化芸術センター)

2025/7/19
らいてう講座①

ジェンダー平等をすすめる家庭科教育
意見・感想から

講演後の交流会では、自身の高校家庭科は別学で違和感があった、家庭科教育に偏見があった、という方から家庭科の内容をもっと知りたいとの感想があがった。家庭科の内容や家事労働、性別役割分業は身近な経験もあり多くの発言があがった。現代の若い夫婦は率先して家事分担を担っている。

《一般参加の感想》

家事について、孫世代は自分でやっている。教育の力だと思ふ。家庭科が社会の動きと関連している教科であることが分かった。学校教育で人々の考え方が方向付けられてしまう歴史、現実を知った。なぜ性別役割分業のようなジェンダー観が作られてきたのか知ることができた。

《教員の感想》

最近でも女性らしさ男性らしさを評価したがる風潮がある。根強い女性観・男性観が変わらないのは人権感覚の無さ、個人の力関係や立場の上下を許している社会なのだと感じる。「意識を変えていく」ということはとてもない時間と労力がかかっている。未来を生きる人たちが男女の差別なく自分らしく生きられるように家庭科を通して伝えていきたい。

らいてうの婦人解放思想や青鞥社の運動は、今もなお現代的な課題として残存している。時代に逆行する風潮もある。今後も家庭科教育、らいてうの会の活動など身近な行動を通して、真のジェンダー平等実現を目指したい。

(櫻井幸子)

シリーズ No. 8

らいてうの家が できるまで

「らいてうの家」が千代田公会堂で開催され、その後「平塚らいてうを記念する会」が発足したのです。

小林 「記念する会」の設立総会は92年5月に損保会館で行われました。100人が集まり、会長は櫛田ふきさん、事務局長は立松隆子さんでした。

折井 立松さんと静岡で行われた日本母親大会で、らいてうのうちわを売って資金を集めたこ

とを覚えていました。

『婦民新聞』の編集をしていた塩谷満枝さんが、長いこと会のニュースを担当してくれました。写真も撮り、読ませる記事も書く名編集長でしたね。事務局長は白井雅子さんが婦団連と兼務でつとめてくれました。

折井 奥村家の知り合いが茅ヶ崎にいて「茅ヶ崎らいてうの会」や市議や地元の方々とは協働しながら市立高砂緑地公園に碑を立てました。碑は、南湖院に行く途中にあります。櫛田さん、小林登美枝さんと何度も茅ヶ崎に通い、石も探しました。

98年5月23日に碑が建立され、瀬戸内寂聴さん、宝井琴桜さん、築添正生さんも来てくれたらいてうの曾孫の奥村ともさんが除幕をしました。

小林 2000年に「記念する会」から「NPO法人平塚らいてうの会」に名称変更し、設立総会で会長は櫛田ふきさん、私は事務局長になりました。

11月16日、長く事務局長をつとめてこられた小林明子さんと、創立当初から会に深く関わっている折井美耶子副会長に、これまでの会の活動について語っていただきました。

「平塚らいてうをしのぶ展」と碑の建立

ニュース1000号記念

これまでの活動を振り返って

本号では会ニュース100号(2018年1月)を転載します。



創刊当時のらいてうニュースを前にして
小林明子さん(左)と折井美耶子さん

(次号に続く)

【事務局日誌】

- 10月5日 森のめぐみ講座 庭の笹刈り、草刈り
- 10月6日 青木村義民の里を巡る 講師・坂井弘さん、坂井弘子さん
- 10月9日 第2回代表理事会(オンライン併用)
- 10月23日 資料整理
- 10月28日 らいてうの家 大掃除・水拭き
- 10月29日 ワックス塗り・反省会・展示収納作業
- 10月30日 展示収納作業
- 展示資料を真田公民館に預ける
- らいてうの家冬期休館
- 11月13日 第4回理事会(オンライン併用)
- 11月27日 パネル検討委員会・資料整理
- 12月11日 第3回代表理事会(オンライン併用)
- 12月13日 第19回「平塚らいてう賞」贈賞式(於日本女子大学新泉山館)
- 12月25日 パネル検討委員会

ご寄付のお願い

記念事業成功のため、また、会と家の維持発展のための募金活動につきましましては、多くの皆さんにご協力いただきありがとうございます。らいてうのころざしをさらに広げるために、「ご寄付のお願い」を再度同封させていただきます。よろしくお願ひいたします。

NPO法人平塚らいてうの会
ホームページはこちらから ↓

